

<特別寄稿>

パットナムの機能主義批判

——読書ノート：Hilary Putnam, *Representation and Reality*, The MIT Press, 1988.——

伊 藤 邦 武

I

「機能主義 (Functionalism)」ということばは社会学や芸術の分野でも用いられる用語であるが、ここでは哲学における心身問題をめぐると一つの立場としての機能主義を問題にする。心の哲学における機能主義とは、われわれの精神のさまざまな作用が、人間に特有な機能として、その機能を担う物質的な基礎 (身体, 脳, 神経系等) とは別な説明原理にもとづいて分析されうるという立場である。人間の身体に関する生理学的説明が根本的には物理的因果法則にのっとってなされるのに対して、精神の作用は機能的な説明原理に従うというのである。

この考えはもともと19世紀末以来ウィリアム・ジェームズやデューイらの機能心理学において確立されたものであるが、今日ではコンピュータ科学の発達に促されて、人間の身体と精神活動の対比をコンピュータのハードウェアとソフトウェアの対比のアナロジーとして理解する立場、と解されている。そして、心の哲学においてこのようなコンピュータ・モデルにもとづいた分析の有効性を最初にもっともあからさまに説いたのが、本書 (『表象と實在』) の著者パットナムであった (たとえば、彼の *Philosophical Papers*, vol. 2 に取められた, “Minds and Machines”, “The Mental Life of Some Machines”, “The Nature of Mental States” 等の1960年代の論文)。パットナムのこの考えは1970年代には認知科学 (cognitive science) という、言語学、人工知能、認知心理学、哲学等を総合した学際的研究の基礎を提供した。そしてその成果は今日のわれわれの生活の広い分野に応用されている。その意味で、機能主義は

今日の心の哲学におけるきわめて有力な立場の一つとなっているといつてまちがいないであろう。

しかし、本書のなかでパットナムは自らが生みだしたこの哲学的立場が誤りであると断じている。本書は MIT Press の一部門である Bradford Books の一冊として出版されているが、Bradford Books こそは、フォードやドレツケ、スティッチ、チャーチランド、バーワイズ、ペリー等の著書を通じて、認知科学の有効性を擁護し基礎づけるためのさまざまな哲学的議論を大々的に展開してきた部門であった。いいかえれば、この部門は現代の機能主義の牙城に他ならない。本書は最近この部門に新たに加えられた“Representation and Mind”シリーズの第一冊として出版されたのである⁽¹⁾。このシリーズからはその後、チョムスキーやフォードの強力な批判者カツツの *The Metaphysics of Meaning* や、心についての一切の科学的説明を拒否するウィトゲンシュタインの立場に立つダイヤモンドの *The Realistic Spirit; Wittgenstein, Philosophy and the Mind* 等が出版されている――。

何が起きているのだろうか。機能主義は今や、ここ二、三十年のはなばなしい盛隆のちにゆるやかな反省期に入ったのであろうか。それとも、機能主義の生みの親の一人が、単なる個人的な変心から小さな内部的ゲリラ部隊を編制しようとしているのだろうか。パットナムにかぎっていえば、その理論的修正は目新しいことではない。彼はかつて「科学的实在論」の代表的論者であった。しかし彼は1970年代後半以後この立場をはなれ、「内部的实在論 (Internal Realism)」という一種のカント主義を標榜している。彼は今度は心のコンピュータ・モデルについても放棄しようとしているのである。こうした度かさなる哲学上の変心(変節?)について、本書の冒頭にはこう書かれている。

「奇妙なことに、私のこうした態度を批判する哲学者たちがいる。私が哲学における立場を変えることは、一種の性格上の欠陥だというのである。私は冗談でこう答えることがある。私がこのようにしばしば立場を変えるのは、私がいくつも誤りを犯すからであり、ほかの哲学者たちが彼らの立場を変えないのは、彼らが決して誤りを犯すことがないからであると。しかしここでは私はまじめに、次のことをはっきりと言っておきたい。私は1953年から55年にかけてルドルフ・カルナップとかわたした多くの会話を決して忘れないであろうが、その中でもとくに、彼がつねに自

分は何度も哲学的立場を変えたということを強調していた、ということをおぼろげに覚えておこう。『私はかつてこう答えたが、今ではこう考える』が彼の口癖であった。そして言うまでもないことであるが、カルナップが私に影響を与えたのと同じようにカルナップ自身に影響を与えたラッセルも、その何度かの立場の修正を批判されたのである。私は現在カルナップ自身のどの時期に属する理論についても同意することはないが、しかし私にとってカルナップは今でも、真理の探究ということをおぼろげに個人の虚栄よりも重視した一人の人間の傑出したモデルを示しているのである」(p. xi)。

II

『表象と実在』は序文を別にして、7つの章からなりたっている（第一章「意味と精神主義 (Mentalism)」, 第二章「意味, 他者, 世界」, 第三章「フォーダーとブロック: 『狭義の内容 (Narrow Content)』をめぐって」, 第四章「指示や真理といったものは存在するか」, 第五章「なぜ機能主義はうまく行かなかったのか」, 第六章「機能主義の他の形態」, 第七章「別の見方の素描」)。

これら七章のうち、一章から三章までは、もともとフォーダーの立場に対する批判を主題とした別の二論文を書き換えたものであり⁽⁴⁾、第四章は、いわゆる「消去主義 (Eliminativism)」——心的現象についての我々の日常的言及をすべて民間心理学 (Folk Psychology) と考え、これを厳密な科学的説明に耐えないものとして消去することを提唱する立場、たとえばチャーチランド——に対する批判である。第五章は機能主義に対するさらに別の批判であり、第六章はルイスと、かつてのパットナム自身に対する批判である。第七章はこれらの批判を踏まえたうえでの、心の哲学に対する新しい見方の提唱である。

『表象と実在』はそれゆえ、次の三つの主張とそのための議論を柱として成り立っている。

- 1) 志向性——意味 (Meaning), 指示 (Reference), 信念の内容 (Content of belief) 等——は、物理的・計算的性質や関係に還元できない。(Intentionality is not reducible to physical and/or computational properties or relations.) (1-3, 5-6章)
- 2) 志向性は消去可能でもないし架空的なものでもない。(Intentionality is nei-

ther eliminable nor mythical.) (4章)

3) 志向性の理解のためには、新しい哲学的見方が必要である。(7章)

以下、順にこれら三つの主張と議論を見てみよう。

まず、主張1)であるが、この主張は二つの部分からなる。前半の1-3章は、言語の哲学によって、心の作用を精神内部の出来事と考える「精神主義」を批判し、同時に、フォーダーの『思考の言語』の理論がこの精神主義のゆえに誤っている、と論じるものである⁹⁾。

パットナムのいう言語の哲学における精神主義とは、たとえば言葉の意味を「観念」と考えたロックに典型的に見られるような、意味を精神内に内在するものと考え、この意味(観念、概念)を介してのみ言葉はその指示対象と結び付き、また複数の文どうしの同意義性もこの精神的概念の一致による、という考えである。パットナムによれば、フォーダーの理論は、「我々の言語能力は、生得的な一群の文法規則を計算的に適用して文を生成する能力に他ならない」と考えるチョムスキーの生成文法理論を、この精神主義の意味論に結び付けたものである。すなわち、フォーダーによれば、信念の内容としての文の意味は、生得的な概念的意味内容が、我々のうちなる「精神的表象 (mental representation)」として存在し、この表象に対する計算的操作の結果生じるものが、信念の内容、すなわち、文の意味としての「狭義の内容」である(狭義の内容は「精神言語 (Mentalese, *lingua mentis*)」によって書き表されている。「広義の内容 (broad content)」はこれに対して、各々の狭義の内容を個々の叙述の領域、可能世界へ投射する関数である)。フォーダー自身は、このような心の内部の表象によって意味の成立を分析する自らの方法を、「方法論的独我論 (methodological solipsism)」と呼んでいる¹⁰⁾。そして、信念の形成を一連の計算的操作の結果と見る点で、彼の理論は機能主義の一つと目されているのである。(フォーダーの理論のもう一つの特徴は、チョムスキーのその後の理論的發展を取り入れて、信念形成の能力のうちにモデュラー的構造を想定し、「汎通的知性 (general intelligence)」の存在を否定する点にあるが、この点はここでは問題にしない。)

このようなフォーダーの理論に対して、パットナムは本書の大きな部分をさいて批判を行っているが、そのわりには論旨は必ずしも歯切れがよくない。しかしその要点はだいたい次の二点から成っているとされる。

まず批判の第一点は、クワインの全体主義 (Holism) からするものである。クワイ

ンによれば、様々な文の意味は、それらの文が属する信念の体系全体との照合のもとにおいてのみ決定される。それゆえ、文の意味が生得的な概念の単位を基礎にして、計算的に構成されるという理論は成功しないと考えられる。クワインはこの全体主義にもとづいて、有名な「翻訳の不確定性 (Indeterminacy of Translation)」と「指示の不可測性 (Inscrutability of Reference)」のテーゼを導くのであるが、バットナムはこの翻訳の不確定性を認めたくて、ここからさらに、文の意味というものが規範的な概念であることが導かれると考える。というのも、我々がもしもこの翻訳の不確定性を克服するために、デイヴィドソンのいう「慈善の原理 (Principle of Charity)」のようなものを必要とするというのであれば、文の意味すなわち信念の内容という概念には、必然的に規範的な要素が帰属することになるからである。この点で、文の意味を機械的・計算的な操作の構成物と考えるフォーダーの立場は、誤っているのである。

フォーダーに対する批判の第二点は、バットナム自身の言語理論である、「言語的分業 (linguistic division of labor)」説によるものである。この説によれば、様々な語の指示対象を決定するもの、すなわち意味は、その語を使用する個々の人間の心のうちに平等に分け与えられているのではなくて、限られた人間によってのみ所持されている。たとえば、ブナとニレの区別ができない者には「ブナ」や「ニレ」の語の意味は存在しない。「金」という言葉の意味を知るのは化学者である。また、「シーザー」や「モーゼ」といった固有名詞の指示対象を決定できるのは、これらの語の命名者である。したがって、言葉の意味は社会的に分業された仕方でも担われているのである⁶⁾。さらに、言葉の意味は言語使用者を取り巻く環境によっても決定される。たとえば、双生地球 (Twin Earth) 上の流体がいかにこの地球上の水とそっくりな性質を持っているように見えたとしても、その組成が H₂O ではなく XYZ であれば、それは水ではない。つまり、言葉の意味は社会的・環境的な要素によって決定されるのであり、しかも常に将来の研究によって改変される可能性がある。この点で、意味を生得的な「精神言語」の産物と考えるフォーダーの理論は、誤っているのである。

以上が、フォーダーを中心とする MIT の機能主義に対する批判である。

他方、五章と六章で展開される批判は、このような精神主義を必ずしも前提しない機能主義一般に対して向けられている (機能主義に対する第二の批判)。ここでの機能主義は、次のような主張の何れかをとると考えられている。

- 1, Fa という信念をもつあらゆる人間が取る一つの物理的・計算的状態 (physical and/or computational state) がある。
- 2, 我々は様々な物理的・計算的状態に対して, その幾つかからなる集合が, Fa という信念をもっている状態の集合と等価 (equivalent) であるということを示す, 等価関係を定義することができる。

パットナムによれば, これらの何れの立場も信念にまつわる次のような問題を克服できないという。その問題とはすなわち, 我々が何らかの信念をある人物に帰するとき, 我々はその人物と我々自身の信念の相違に目をつぶらなければならない, という問題である (the problem of discounting differences in belief)。

我々はたとえば, 他人が「女性」という言葉や「ネコ」という言葉を用いて, 我々とは極めて異なった信念を表明するのを耳にしても, そうした相違には目をつぶって, これらの言葉の意味は互いに同じであると考えている。しかしこうした相違はどの程度まで許容され, どの程度に至ったら意味の同一性そのものが拒否されるようになるのだろうか。

「我々の解釈そのものからして, 彼らの信念と我々とがきわめて異なっているとされるとき, それにもかかわらず, 我々の言葉と彼らの言葉が同じ意味をもつとすべきか, それとも, 我々の翻訳の結果得られる信念があまりにも奇怪なので, 翻訳を改訂すべきかという問題は、『合理性 (reasonableness)』の問題である。機能主義による同義性と指示の同一性の定義は, こうした合理性に関する直観的な判断を形式化しなければならなくなるであろう (それも恐らく, 「合理的に再構成」しなければならぬだろう)。このことはしかし, 人間の本性を全体にわたって (*in toto*) 精査することとおなじぐらい容易ならぬことである。そして, そうした同義性と指示の同一性に関する定義を実際に構成するという考えは, まったくのユートピア的梦想である」(p. 75)。

上に挙げた二種類の機能主義は何れもこの問題を抱えてしまう。最初の単純なバージョンは, そもそも, 我々の信念というものがさまざまな欲望や期待, 予測と密接に絡み合ったものであるという事実を無視している。また, 二番目のバージョンは, 信念の集合というより広い単位を定義の対象としているにしても, この単位の特

定のためには人間の本性とその環境についての「一切の」知識が必要となる、ということをおぼえている。したがって、何れの機能主義のプログラムも原理的に達成不可能なのである――。

ついでに言えば、D. ルイスと初期のパットナムの機能主義は、こうした信念の解釈の問題をそもそも含まないように定式化されていた⁽⁶⁾ (第六章)。すなわち、この理論では、信念 Fa とは民間心理学でいう或る心理的状态を「因果的に実現 (causally realize) しているもの」のことであった。しかし、ここでいう「実現」ということが、どのような制約を満たすものでなければならないかが特定されないかぎり、この立場は、機能主義がその克服を目指したはずであるところの行動主義 (Behaviourism) に逆戻りしてしまうか、単なる空虚な理論に留まるかの何れかでしかない。そして、そのような制約は、決して満足 of いくような仕方では与えられなかったのである。

それゆえ、機能主義は (少なくともこれまで考えられたかぎりでの形では)、いずれも失敗を余儀なくされている。いかえれば、我々の志向性を何らかの物理的・計算的な過程に「還元」しようとする企てには、そもそも無理があると考えられるのである。

III

心の作用を科学的により厳密な記述へと還元する方法は成功しない。では、心に関するあらゆる言明を捨ててしまう消去主義が正しいのだろうか。そうではない、というのが本書の第四章でパットナムが主張することである。

チャーチランドやスティッチらの消去主義によれば、我々が日常的に用いている「信念」や「意味」といった概念は、その厳密な用法を特定することのできない概念である。これらの用語は、我々の日常言語が無反省的に前提している「民間心理学」の中でのみ有効であるような曖昧な用語であり、この心理学がその整合性に関してもその説明力に関してもきわめて貧弱なものである以上、これらの用語も心の科学においては捨てられなければならない。機能主義がこれらの概念を何らかの物理的・計算的な過程に還元することに失敗するとしても、それは機能主義が誤っているからではなくて、そもそも還元すべき当の対象が存在しないからであるというのである⁽⁷⁾。

しかしながら、我々が信念という概念を消去するとしたら、我々は同時に「信念が

表すもの」,「信念の正しさ」という概念も消去しなければならないであろう。というのも、信念という概念には、それが何物かを表し、その表していることが正しいか誤っているかの何れかである、という概念が必然的に伴われているからである。したがって、「信念」を消去することは、同時に「指示」や「真理」の概念を消去することである。いいかえれば、我々は民間心理学を放棄することによって、「民間論理学(Folk Logic)」をも放棄し、真理にとって代わる概念(successor conception of truth)を見出さなければならない。しかしこのことはきわめて容易ならざることであろう、というのがパットナムの判定である。

幾人かの哲学者たちは、タルスキ流の意味論的真理概念によって、我々の直観的な真理概念を置き換えることができる、と考えている。つまり、我々はタルスキ流の真理論を構成することによって、「真理」そのものの意味を不問にしたままで、様々な文の真理を形式的に定義できる、と考えている。しかしパットナムによれば、この考えは誤りである。

タルスキが言語 L_1 に対して構成する真理論においては、個々の文の真理は次のような形式によって定義される。「文 S は言語 L_1 において・・・のとき、そのときに限って、真である。」この定義が有意味であるためには、前以て言語 L_1 (たとえば英語) そのものについて定義が与えられていなければならない、それは次のような形を取らざるを得ない。

言語 L_1 (定義): L_1 のあらゆる語 W と、 x に関して、我々は次のような場合にのみ W を用いて x を指示する。1) W = "snow" かつ x = 雪, 2) W = "moon" かつ x = 月, 3) W = "white" かつ x = 白, 4) W = "blue" かつ x = 青。また、 L_1 の文 S は、次の場合にかぎって真である。1) S が s-n-o-w-space-i-s-space-w-h-i-t-e と綴られ、かつ雪は白い。2) S が m-o-o-n-space-i-s-space-b-l-u-e と綴られ、かつ月は青い。これらの綴り以外の文は、 L_1 の正式な文ではない。

この定義には、「指示」や「真」という概念が現れている。しかしこれらの概念は「言語 L_n における」という限定のつかない、指示そのものであり、真理一般である。したがって、タルスキ流の真理論が有意味であるためには、直観的な真理概念を保持するか、あるいは、言語 L_1 の定義を同語反復的なものにする他はない。しかし同語

反復的な定義は、定義の用をなさないであろう。また、タルスキ理論の要点を、「言語 L₁における真理」を「L₂における真理」へと置き換えてゆく言語どうしの相関関係の分析と見る、デイヴィッドソンのような解釈も成り立たない。なぜなら、そのような相関関係の分析と、ある言語の文 S の真理性の分析とは、別の事柄であるからである。

したがって、我々はタルスキに従って真理を消去することはできないし、信念を消去することもできない。志向性は捨て去ることのできない概念なのである。

IV

以上が、本書の機能主義と消去主義に対する批判の骨子である。すぐ気が付かれるように、これらの批判にはいくつかの曖昧なところや、未決着なところが残っている。たとえば、フォーダーはその後の著作で、意味は狭義の内容とコンテキストとによって決定され、このコンテキストには様々な種類の社会的、環境的な要素が含まれるとしているが¹⁰、このような考えとパットナムの理論とが相容れないものであるのかどうか。このことは特に、パットナム自身が本書のなかで、自分は「原則として、人間や機械、シリコン・チップでできた生物、身体のない精神の働きは、或る抽象的なレベルでは同一なものとして記述できる」という機能主義の根本的な着想までも否定しているわけではなく、ただ、精神的な状態と機能的な状態とを直接的に同一視することは不可能であると言っているにすぎない、と断っているために (p. xii)、ますます曖昧である。しかし、ここではこれらの批判をさらに吟味することせずに、以上の批判をもとにして、パットナムがここからどのような提言を行おうとしているか、という点を見てみることにしよう (第七章)。

さて、志向性は科学的に説明できる現象ではない。しかしそれは消去できるものでもない。このことは明らかに一つのディレンマではないだろうか——。そうではなくて、このことがディレンマに見えるのは、世界とその説明ということについての誤った考えに立脚しているためであって、我々はむしろ心の哲学の新しいパースペクティブを開くために、このような誤った考えをまず捨ててかかる必要がある——。これがパットナムの提言の要点である。

機能主義はもともと、我々が世界のうちなる事物や事態に対して志向的に関係する

という事実に注目して、この事実をシステムティックに説明する理論を打ち立てようとした。しかしその説明のまえには、我々の合理性という科学的に理論化不可能な障害が立ちただかかってしまう。そこで志向性を消去しようという考えが生まれる。しかし、問題はむしろ、機能主義が無批判的に有している、「世界のうちなる事物や事態」と「これらを表象しているという事実」とがともに始めから存在しているという想定、つまり、これら（表象している有機体とそれをとりまく環境）を含む「対象全体」というものがあらかじめ与えられている、という前提そのものの方にある。

我々は我々自身の合理性を物理的・計算的に説明する理論を構築することはできないが、このことは単に言語的意味の翻訳にまつわる局所的な問題ではない。というのも、「対象」や「事実」といった概念がそれ自体「合理的認識」という概念と内在的に結びついたものであるならば、対象全体に対するシステムティックな説明という考えそのものが、始めから無内容な企てということになってしまうからである。機能主義の失敗は、消去主義が言うように、信念などの心的現象が存在しない、ということを示しているのではなくて、むしろこうした無批判的な認識論的・存在論的前提の破綻をこそ指し示しているのである。

我々はクワインの不確定性のテーゼやゲーデルの不完全性の証明によって、「もの」や「認識」といった概念が、個々の記述に先立って予めその意味が確定した概念ではない、ということを知っている。それゆえ、「我々の分析や記述に先立って存在している世界」という概念は無意味である。しかしこのことは、世界が我々の記述しだいでどのようにも解釈可能であるという、いわゆる「相対主義 (Relativism)」が正しいということの意味しているわけでもない。なぜなら、世界についての多様な解釈という考え自体が、「世界」という一つの全体を予め前提してしまっているからである。

(ついでに言えば、パットナムはここで、「真理」とは「認識者のグループにおいて共通に認められている信念以上のことを意味しない」というローティのラディカルなプラグマティズムに対しても、次のような面白い批判を行っている。すなわち、プラグマティストたちは、自分の真理論が哲学における少数意見であることを知りながら、自説が正しいと論じているが、このことは明らかに自駁的である、と。)

我々は機能主義的な科学理論を望むこともできないし、相対主義に留まることもできない。それでは、どのような途が残されているのだろうか。残念ながら、その十分な答えは本書には与えられていない。本書の序文には、「私はいつか将来に、もっと

大きな形而上学的問題に戻ってきたいと希望している」と書かれている。そして、本書は次の言葉で終わっている。

「真理という認識論的概念、対象という概念、指示という概念、意味という概念、そして理性そのもの、これらはいずれも開かれた組成 (open texture) をなしており、しかも互いに結びついている。これらの概念についての真剣な哲学的研究が出發すべき点は、この相互の結びつきという点である」(p. 120)。

我々は、あるいは少なくともパットナムは、このような研究の有力な端緒をすでに見出している、と言えるのだろうか。恐らくそうではないのであろう。というのも、本書とは別の論文で、彼は次のように書いているからである⁹⁾。

「もしも私があえて形而上学者であろうとしたら、私は、存在するものはすべて義務 (obligations) に他ならない、という一つの体系を作り出すのではないかと思う。・・・しかし——残念なことに——私はそれ程の大胆さをもちあわせてはいない。・・・私が現在言っていることは恐らくこういうことになるだろう。すなわち、今や、存在論に関するモラトリウム、認識論に関するモラトリウムの時代が訪れたのだ、と。あるいはむしろ、何が『宇宙の構成要素 (the Furniture of the Universe)』であるかを記述しようとし、何が『本当に存在するもの』であり何が『単に人間が投影したにすぎないもの』かを教えるようにするような、そういう種類の存在論的な思弁にとってのモラトリウムの時、そして、我々のすべての信念の正当性を判定するための『唯一の方法』を教えようとするような、そういう種類の認識論的な思弁にとってのモラトリウムの時、が来たのだ、と。」

モラトリウムの時代——これが、機能主義の生みの親パットナムの下す、現在の心の哲学が置かれた状況に関する判断である。しかし、モラトリウムの勧めは、相対主義とは正反対である、と彼は強調する。合理性と非合理性の区別について懐疑的なまなざしを向けることが大切なのではなくて、この区別について、さらにつこんだ分析のための努力が続けられなければならないのである。

「私がデリダに同意するところがあるとしたら、それは次の点に関してである。すなわち、哲学は書き物 (writing) であるということ、そして、それはそれ自身の権威を、それが『哲学』であるということによって相続したり、与えられたりするのではなくて、常に新たに勝ち取ってゆくような、そういう一つの書き物であることを学ばなくてはならない、ということである¹⁰⁾。」

註

- (1) このシリーズの編者はパットナムとブロックである。
- (2) もとの論文は次の二編である。“Meaning and Our Menatal, Life”, in *The Kaleidoscope of Science*, ed., Edna Ullman-Margalit, Reidel, 1986.
“Meaning Holism”, in *The Philosophy of W. V. Quine*, eds., Lewis Hahn and Paul Schilpp, Open Court, 1986.
- (3) Jerry Fodor, *The Language of Thought*, Thomas Crowell, 1975.
- (4) Fodor, *RePresentations*, MIT Press, 1981.
- (5) 周知のように、固有名詞をめぐる指示の因果説は、パットナムとクリプキによってほぼ同時に唱えられ、この説がパットナムにとっては科学的実在論を、クリプキにとっては一種のアリストテレスの本質主義の基礎を与えるものと考えられた。しかし本書ではパットナムは、この説が「言語的分業論」の一部、つまり意味の社会性の主張に他ならないと解説している。ここに、自説に対するパットナムの再解釈の跡がはっきりと認められる。
- (6) David Lewis, “Psychological and Theoretical Identification”, *Australasian Journal of Philosophy*, v. 50, 1972. ルイスの機能主義に関する諸論文は、彼の *Philosophical Papers*, vol. 1, Oxford Univ. Press, 1983. に収められている。
- (7) Cf. Paul Churchland, “Eliminative Materialism and Propositional Attitudes”, *Journal of Philosophy*, v. 78, 1981.
- (8) Cf. Fodor, *Psychosemantics*, MIT Press, 1987.
- (9) Putnam, “Why is a Philosopher?”, in *The Institution of Philosophy*, eds., A. Cohen and M. Dascal, Open Court, 1985, p. 70-73. この論文は、パットナム自身の思想の軌跡を、現在の時点で概観し、それを分析哲学全体の流れとも関係づけたものとして、興味ぶかいものである (この論文は最初, *Encyclopédie philosophique universelle*, t. I, ed., André Jacob, P. U. F., 1985. に仏語に翻訳されて発表された)。
- (10) *op. cit.* p. 74.

〔京都大学助教授〕